

SHIMANTOGAWA MONOGATARI

2020.9.26
Vol.288

四万十川財団設立 20 周年記念！首長インタビュー 第 4 弾 中土佐町長 池田 洋光氏



今月の清流通信は、四万十川流域首長インタビュー第 4 弾！ということで、土佐の一本釣りで有名な町、久礼地区がある旧中土佐町地域と、豊かな森林に囲まれた四万十川の上流域、旧大野見村地域からなる中土佐町の池田洋光町長にお話を伺いました。

■ 町長は大野見出身とのことですが、子どもの頃、四万十川でどんな遊びをしましたか。

私が子どもの頃、地域の人は四万十川のことを大川と呼んでいました。昔は今ほど栄養を十分に摂取できるわけではなく、暮らしとしては厳しく不便な生活ではあったかもしれませんが、四万十川は水量も多く、アユやウナギなどの資源も豊かでした。今思えばあんな贅沢なことはないですね。山ではアケビをとり、近所の柿をとったりして怒られることもありました。当時は遊ぼうと思えばいくらでも遊べる環境がありましたから、アユを捕ったりするのはもちろんですが、無茶苦茶な遊びもしましたね。今では考えられないですが、肝試しで大雨が降って水が出ている川を、対岸まで 100m くらい流されながら泳いで渡ったこともあります。林ではツリーハウスを作ったり、ツタをターザンロープのようにして遊んだり、山の中腹辺りから麓まで木だけをつたって下ったこともありました。それは、当時そういう林がたくさんあったということです。山と川がさまざまな遊びを提供してくれました。

■ 子どもの頃よく山で遊んだとのことですが、今は人工林が増えた印象がありますね。

かつて旧大野見村では全山植林政策が行われました。昔は木材のほうが田んぼや土地よりもお金になるということから、長男には山を与えたというような、山の価値が高かった時代が僅かですがあったんです。その当時は、植林をしていない裸山でも 1ha あたり 30 万円ほどの価値がありました。しかし、今は 1ha あたりに 40 年物のヒノキが 2000 本生えているような山が、40 万～50 万円ほどの価値にしかない場合もあるのです。手入れのされようや道の付けやすさなど、条件によって値は変わりますが、それでもかつてと比べれば、山の価値が下がっていることがわかります。木材の値も下がり、市場へ支払う手間賃等を差し引くと利は出ません。それに対して山は手がかかります。枝打ち、除間伐作業など苦勞して丁寧に育ててもお金にならないのです。山は海の恋人と言いますが、山が適正に管理されて初めて川の清流が保たれるのだと思います。今は山が手入れされず、間伐も枝打ちもされぬまま木が育ち、鬱蒼として下草が生えない、根が張らない保水力のない山が増えてしまったゆえに、大雨になると一気に土砂と一緒に水が流れて川に濁水が流れる、ひどければ深層崩壊が起き、土砂ダムが川をせき止め、大洪水を起こしてしまう。これは四万十川も含め、日本の河川が置かれている状況だと思えます。適正に管理された山は下草が生え、それが腐葉土に

なって微生物が増え肥沃な土になり、その養分で木が大きくなり根がしっかり張る。水源涵養の機能もあり、健全な生態系を育む山、そういった山が圧倒的に少ないから、清流四万十川と言えども残念なことが起こっているのではないかと思います。川を守るためにはまず山を守ること、治山が重要ではないかと考えています。また、近年は所有者がわからない森林や分収林の管理も課題になっています。これらについては森林環境税を活用しながら対策を取っていきたいと考えています。

■ その他に町長が感じる四万十川の変化はありますか。

山の変化に関連して、水質の変化があると思います。戦後の高度経済成長期、化学洗剤による川の汚れが全国的に問題になったことがありました。そこで大野見では、当時の婦人会が団結して、化学洗剤を使わないという運動が起こりました。昔から大野見の人々は川を大切にしながら暮らしてきたのです。加えて今は人口も減り、生活様式も変化し、環境に配慮した生活への意識も高まっていますから、以前よりさらに水はきれいになっていると思います。しかし、根本の山の問題が改善されなければ、以前のような四万十川に戻すことはなかなか難しいのではないかと思いますね。

■ 中土佐町が四万十川に対してこれまで行ってきたことを教えてください。

これまでお話したように、川を守るためにはまず治山が必要です。そのため中土佐町では、町有林や分収林の適切な管理に取り組んでいます。具体的には、昨年度から今後数年にかけて、面積にして 13ha の町有林を整備しながら、材を搬出していくという取り組みを行っています。町内には水源機能を持つ森林も多くありますので、そういった森林を守っていけるよう、間伐推進にも力を入れながら森林保全に取り組んでいきたいと考えています。

また、川へ直接的に関わる取り組みとしては、住民の清流保全の意識を育めるよう、毎年春に四万十川の一斉清掃を行っていますし、平成 28 年度からは、漁業者や地域住民で構成された河川保全委員会が実施している、生態系の維持・保全を目的とした四万十川の清掃活動及び水生生物のモニタリング調査等への支援を行っています。



↑大野見の風景

■ 最後に、中土佐町にとって四万十川はどんなものだと考えますか。

大野見では昔から「川は近いが水が遠い」と言われてきました。農地と河川の高低差があるため、先人たちは農地に水を入れるためにずいぶん上流から順番に水を流しながら、苦勞して水を引いていたと聞きます。また飲み水は支流の谷水を利用していましたし、言うまでもなくアユやウナギ、アマゴなどの川の幸は住民のお腹を満たし、川の恵みが人々の生活を支えてきました。四万十川は住民にとって精神的バックボーンの一つです。時には自然が牙をむき、人々の生活を壊すこともあります。四万十川の恵みをいただき、川とともに暮らしてきた歴史があります。そんな歴史をこれからも大切にしていかなければいけないと思います。

大野見地域は、その面積の 90%以上を森林が占め、林業や農業が盛んに行われてきました。昔は切り出した材木を筏流しなどの方法で四万十川に流して下流まで運んでいたといえます。大野見では山と川を活用した生業が、人々の生活を支えてきました。町長が仰る通り、山と川、海は繋がっており、山の変化は当然川や海にも影響します。今回の取材で、池田町長には森林管理の大切さを熱く語っていただき、町が行っている森林管理についてお話いただきました。その他にも中土佐町では、中学校の体育館に町産の木材を使用するなど、木材の利用にも力を入れています。今は外国産の木材が流通していますし、そもそも木材が利用されることが少なくなっています。森林保全の第一歩として、意識して国産の木材を使ってみるのもいいかもしれませんね。

私たち四万十川財団も豊かな川を守るため、山を管理する森林ボランティアの育成にこれまで力を入れてきました。一方で、今流域では山を手放したいと考える人が増えており、市町や森林組合も受け入れに限界が来ているという現状があります。そこで、今後はこれまでの活動に加えて、財団で放置林を適切に管理していく、そんな体制が作れるよう、今準備をしているところです。クリアしなければいけない課題はさまざまありますが、多くの方々の知恵を借りながら、来年度実施を目指して準備を進めていきたいと思っています。



↑町長の出身地 大野見竹原地区